平成２０年（ワ）第１９３１４号

陳　述　書

平成２２年１月２９日

東京地方裁判所民事部裁判官殿

第１　はじめに

平成１７年８月１８日東京動物夜間病院に入院する時点で，ポン太は決して瀕死の重傷などではありませんでした。

しかし，８月１９日早朝　アニマルメディカルセンターに転院し入院

８月２０日夕方　アニマルメディカルセンターを退院

８月２１日深夜　動物救急医療センターに入院

８月２２日早朝　アニマルメディカルセンターに転院し再入院

８月２２日夕方　アニマルメディカルセンターを退院

８月２３日午後　アニマルメディカルセンターに再々入院

の経緯を経て，ポン太は瀕死の状態となって，８月２３日２３時頃死亡しました。

８月２３日１９時４０分，「容態が急変した」と電話を受け，病院へ駆けつけたとき「血栓ができたようです。よくあることなんです。」と聞かされただけでした。その原因について何ひとつ説明がありません。

亡くなった直後，「ポン太ちゃんは偉かったですよ。最後まで自分で呼吸していましたから。」と言われました。心臓は機能していた？　では，なぜ亡くなったのでしょうか？　また，ポン太が入院中に何をされて舌先を負傷し，しなくてもいい痛み苦しみを味わうことになったのでしょうか？

以下の陳述は，当時その都度紙片や携帯・パソコンにメモしていたものを整理し，

平成１８年８月頃代理人の弁護士先生から示された陳述書の書き方に副ってまとめてきたものです。

第２　ポン太との出会いと生活

ポン太との出会いは，仕事で終電にも間に合わず帰宅できないことがでてきたため，会社の近くに部屋を借りたことがきっかけでした。生まれた頃から常にペットの犬猫が家にいる環境で暮らしてきた私は，留守がちでも猫だったら飼えるかと思い，ペットショップを巡っていたときです。

渋谷のペットショップで上段と下段にあるサークルに，それぞれ５匹の全て犬種が違う子犬が，遊びの時間ということで，いつもなら１匹ずつに仕切られている仕切りがはずされ，一緒に遊んでいました。私がサークルに近づくと，上の段にいたポメラニアンが私の前にお座りして，私の顔を見つめだしました。他の子犬にちょっかいだされて倒れてもすぐに起き上がり，また私の前にお座りしてじっと見つめるのです。犬のサークルの向かいに置かれているケージの中の猫を私が見ているときにも，この子の視線を感じとり気になりだしていました。今の私には犬のペットは無理と思いつつも，休日でかなりのお客がいる中，常に私をじっと見つめ続け，必死に“早くここから出して”と訴えているような姿を見過ごせず，連れて帰ろうと決断させられてしまいました。

私は見るからにたぬきそのものだったこの子に，ポン太と名づけました。

月に２日位しか会社の休みをとることができず，ほとんど一緒にいてあげられなかった私は，一緒にいられるわずかな時間に集中して躾をするような日々を送っていたことから，ポン太はかなりストレスがたまっていたと思います。一緒に生活するようになって２ヶ月半経った頃です。粗相して叱られたポン太が逃げようとしてソファーから飛び降りたとき，前左脚を骨折してしまいました。私はポン太に寂しい思いをさせていたことを反省し，毎日遊んであげる時間を作るために翌日には会社に辞職願を提出し，職場を変えました。

ポン太は人間が大好きで，誰にでもシッポを振って愛嬌をふりまく優しい子でした。状況判断もでき，とても我慢強い面もあったため，１歳を迎えたときには吠えることもなくなり，何処へでも安心して連れて行くことができました。ときどき職場にも連れて行っていたことから，会社の上司・同僚，友達や親戚なども，ポン太は私の息子同様と認識されていました。あと１ヶ月で初孫が誕生するというときに他界してしまった母は，実家にも犬と猫がいるというのに「唯一の私の孫」とポン太を溺愛していました。

第３　ポン太の病気と動物病院

ポン太が１才になった直後に，現住所に転居しました。越してくるまでは，左前脚骨折時に手術をしてもらった獣医師が毎日往診に訪れているポン太と出会ったペットショップへ，獣医師が来ている時間に連れて行って診てもらっていました。

フィラリア予防をする時期だったことから，新居の近所にある動物病院へ連れて行ってみたところ，いきなり「ひざを手術した方がいいですね。いつにしましょうか」と，レントゲンを撮るなどの検査もせずカレンダーを診察台に広げられました。思いもしていなかったことであり，私には異常があるようには見受けられなかったため様子をみることにしました。実家へ行ったついでに，実家の犬猫が当時通っていたトリトン動物病院にポン太を連れて行きひざを診てもらったところ，ひざに異常はありませんでした。この件から，ホームドクターにするには遠方にありますがトリトン動物病院へ通うようになりました。

トリトン動物病院院長から，緊急時にはここまで来てられないでしょうからと紹介を受けていたのがセンターヴィル動物病院でした。〇〇院長が駆け出しの頃に勤務していた病院で先輩だった〇〇院長の病院で、同じ目黒区内にあるということで勧められました。以前から、歯科治療を得意としている病院として名前は知っていました。平成１６年１１月に、ポン太の目の下が歯の影響で腫れあがった時に初めて診てもらい、手術を受けたことがきっかけとなり、通院するようになりました。

センターヴィル動物病院では、院長が診療して、補助についている獣医師か看護士が調剤をしていました。薬剤師の資格のない者が院長の処方に基づき調剤をするという、違法なことが行われていたこともあって、誤調剤が度々ありました。平成１７年７月には、続けて２度の調剤ミスがありました。それを指摘すると、○○院長は間違いを認め精算してくれたのですが、直後に「調剤ミスのことは口外するな」と電話をしてきたり、夜中に無言電話を何度もかけてきたりした（ネームディスプレイに表示されていた）ことから、新たにホームドクターとすべき病院を探していたときに，東京動物夜間病院では２１時から２３時までは一般診療を行っていることを知りました。この時間であれば仕事を終えてから通うことができます。一度連れて行ってみようと思っていました。

平成１７年８月１８日，ポン太に前夜から時々咳き込みがみられ，寝ていても咳により目をさましてしまうように見受けられました。朝，チラーヂンを投与した後朝食，そしておやつ，夕食といつものように食べていて，時々咳き込む以外に特別な異常症状がないことから，この程度であれば普段はもう少し様子を見てから病院へ行くか決めていたところですが，常用薬が残り２日分になっていたこともあり，初めて東京動物夜間病院へ連れて行きました。

病院に入ると，待合室にいた看護士がその場で来院理由を尋ねてきました。

「前日からときどき軽く咳き込み,熟睡できないようなんです。」「食欲はあるし，もどすことも下痢することもなく,元気はあるのですが。」と答えると,看護士は「受付をしてお待ち下さい。」と言って,ポン太を奥の部屋に連れて行ってしまいました。

しばらくすると診察室と書かれた部屋に通されました。この時に初めて上野獣医師と対面したのですが，もう既に検査は終わっていたようで，レントゲン写真を示されました。

「肺に水がたまっていますね。肺水腫です。」「今日はお預かりさせていただきます。」と言われました。呼吸に異常な乱れもなく，レントゲンを見ても，肺のにごり

はわずかで心臓の肥大が進んでいる様子もなかったことから，入院する必要が本当にあるのかなと疑問に思いましたが，その指示に従いました。

入院するにあたり，ポン太は朝，甲状腺機能低下症の治療薬として毎日チラーヂンを１．２５μg，夜には僧帽弁と三尖弁の閉鎖不全症があるためフォルテコールを毎日１２．５㎎とラシックスを１日おきに５㎎服用していることを告げました。そして，肺水腫ということであれば利尿剤が多量に使用されると思われたことから，「利尿剤のラシックスを毎日のませたときに副作用が出たことがあるので，ラシックスの投与量を増やす必要があるときには注射にして下さい。」とお願いしました。

これは，次のような事情からです。

平成１７年２月２８日，センターヴィル動物病院で１日１回，５㎎を毎日のませるようにと初めてラシックスの処方を受けたときです。本来なら尿量が増える薬なのに，いつもより尿が出なくなり，ひきつけを起こしたり心拍数が落ちて具合が悪くなっていったため，診療時間外ですが診てもらいに連れて行き，注射の治療に切り替えてもらうということがありました。この時，院長から「薬の成分が同じでも，投薬方法によって吸収経路が違ってくるために，ポン太くんの場合はラシックスを口から投与すると副作用がでやすいのでしょう」と説明をうけました。その後も，ラシックスを多量投与する必要があるときには注射で投薬されていたことから，上野獣医師にも投薬方法を考慮するよう求めたのです。

また，気管虚脱があることと食物アレルギーがあることを申し出ました。食事に関しては細かく「この子は食物アレルギーがあるので牛肉の入っているものは与えないでください。それに心臓処方食もダメです。ヒルズやウォルサムの心臓処方食が原因で膵炎おこしたことがあるので…。日頃は，朝は低アレルギー処方のドライフードを，夜は鶏のささ身か赤身の豚肉に湯で野菜を混ぜて，栄養価を計算しサプリメントを加えてあげています。」「おやつも牛骨や牛乳が使用されたものは与えられません。山羊の乳で作られたチーズをいつもあげています。」とお話しました。

しかし，上野獣医師は私の申告を一切書き留めず，「数日で退院できますから。」

と言うと，看護士に「薬のこと，よく確認しておいて。」と指示して診察室を出ていきました。缶に入れて持参していた，いつも投与している薬を看護士に渡し，ラシックス，フォルテコール，チラーヂンの各々の服用回数と１回量を書き出したメモを見せながら，再度説明しました。看護士はメモ帳のようなものに書きとっていましたが，私は「薬とメモをこのまま置いていきます。」と申し出ました。しかし，看護士は「控えたので結構です。」と言って返してきました。

そして，看護士は「明朝，武蔵小杉の本院へ移すので，朝７時頃にアニマルメディカルセンターへ電話を入れるか直接向こうへ行って下さい。」と言ってきました。この病院で預かった患者は朝，アニマルメディカルセンターへ移すことになっているというのです。一般診療を行っている病院なのに，なぜ入院患者を転院させるのかとても不思議に思えたことから,「とりあえず電話を入れて様子を伺ったうえで出向くことにします。」と答えると,「昼の受付け時間外はこの番号にかけてください。」とメモを渡されました。

受付で入院手続き（同意書に署名）を行うと，入院後に行うかもしれないという検査や治療等の費用まで請求を受け，その場で支払うよう求められました。実施するか不明であるものの費用の支払いを病院で先に求められた経験がなかったことから疑問を抱きましたが，指示に従いました。

会計を済ませ，帰宅する間際にポン太に会わせてもらいました。すると入院室のケージに入れられたポン太の右前脚の毛が４～５㎝幅にぐるりと一周剃られています。昨年，アニマルメディカルセンターでエコーをとった時にも，お腹の毛が剃られていたことを思い出しました。センターヴィル動物病院で点滴やエコー検査を何度か受けましたが，毛を剃られたことなどありませんでした。

１９日朝，アニマルメディカルセンターへ電話を入れると，ちょっと待たされた後に,「担当することになった土屋です。」と電話口に出た女性が言いました。そして，いきなり「野菜しか食べさせていないんですね？　処方食にしなければいけま

せんね。」と言ってきました。私が「去年，そちらの病院からもらったヒルズの h/d に切りかえた直後に膵炎になったんです。心臓疾患用の処方食は与えないように言われています。」と返答すると，土屋獣医師から耳を疑う言葉が返ってきました。「膵炎になることぐらい仕方ないこと。」というのです。

あまりのいい加減さに呆れるとともに，昨夜，申し出たことやお願いしたことがきちんと引き継がれていないことを知り，食事と常用薬について詳しく説明しました。食物アレルギーについては前年に受診した際にも申告しているため，アニマルメディカルセンターにあるポン太のカルテをみれば書いてあるはずのことだが，念のため牛は絶対に与えないようお願いしました。

土屋獣医師からは，現在の病状や治療方法等についても，昨夜入院後の病態についても，全く話がなく，「入院手続きをしていただきたいので，夕方，面会に来て下さい。」とだけ言ってきました。直接会って病状の説明を詳しくしてくれるということなんだと，この時は捉えていました。

夕方病院へ出向くと，「カルテを作りますので。」と受付けで用紙を差し出されました。「９ヶ月ほど前に検査を受けた時に作ったカルテがあるはずですが。」と言ったところ，「改めて作らさせていただきますので。」と言われました。診療ごとに作成するなんて初めての経験です。昨年わざわざ検査を受けてカルテを作っておいたこともあり，とても不可解でしたが，カルテ作成手続きに応じました。

しばらくして，「診察室」と表示された部屋に呼ばれると，担当の土屋獣医師のではなく，前年に検査に訪れた際に応対した中村獣医師がいました。「明日の検査結果によっては，明日退院できるので１２時に確認の電話をいれて下さい。」と言われました。しかし，前年の検査時はレントゲン写真やエコー，心電図などを示しながら，１時間にわたり詳しく説明をしてくれましたが，今回は担当でないからなのか，病態の説明もなく，検査結果を示したりレントゲンを見せてくれたりすることもありませんでした。「早ければ明日退院できると思います。」と言われたため安心し，退院時には担当の土屋獣医師から説明があるだろうと思い，あえて質問もしませんで

した。

中村獣医師と入れ替わるように看護士が入ってきました。入院費用の見積書を提示し,「面会前に受付けで入院の手続きをしてください。」と言ってきました。受付けで内金を納めて同意書に署名をすると,手続きが終わったことをアナウンスされ,入院室に案内されました。ポン太は呼吸も落ち着いていて，抱き上げると，いつものように顔をなめまわしてきたので明日の退院は問題ないと思いました。

２０日，指示されていたとおり１２時頃，病院へ電話を入れました。すると「先生が診療中なので，１５分後にまた電話下さい。」という応答でした。１５分後に再度電話すると，また同じ対応。３回目に電話した時には「２０分後に…」と言ってきたので,「診療が終わったら電話下さい。」とお願いしました。しかし,「こちらからおかけすることはできません。」という応答。主治医へ電話を入れるように時間まで指定しておきながら，主治医と通話できるまでに２時間も要したり，診療の合間の手の空いた時に電話をくれれば済むことなのに，病院側から電話かけることができないというのはどういうことなんでしょうか？

掛け始めてから２時間位たって，やっと土屋獣医師に取り次がれました。土屋獣医師はいきなり「自宅に酸素ボンベを用意するように。」と言ってきました。「鼻に酸素チューブをつけたままにしておくので,呼吸がおかしい時に吸わせるように…」と言うのです。しかも，チューブを何かにひっかけてケガするおそれがあるというのに,「ケージにも入れずにひとり部屋に置いておいても大丈夫ですよ。」とまで。

私が仕事に出掛け，ポン太がひとり留守番をしているときに酸素補給が必要になることも考えられます。そこで私は「酸素ボンベを必要としない状態で退院できるのはいつになりますか？」と尋ねました。すると「用意できないならいいです。それでも今日，退院できるので１７時半に迎えに来て下さい。」と土屋獣医師はすぐに指示を変更しました。

病院へ行くとすぐに入院室へ通されたのですが，ポン太はケージに入れられたま

まで，扉も閉められていたため触れることもできませんでした。すでに酸素チューブは外されていました。診察室に案内されると，そこに居たのは，また中村獣医師でした。指示通りに出向いたのに，担当の土屋獣医師がまた居ません。

中村獣医師は「これからは自宅で療養してもらいます。１週間後に再診に来て下さい。薬を出しますので…」と言って診察室を出て行きました。中村獣医師が薬を持ってくるのを待っていたところ，看護士らしきスタッフが薬と処方食を持って入ってきました。「入院中も食べさせていたので。」と出してきたのがウォルサムの心臓サポート２の缶詰だったことに，唖然としました。

ウォルサム心臓サポートの缶詰(ウェットフード)には牛肉が使用されています。アレルギー物質が体内に入るとアナフィラキーショックにより死亡する恐れもあることから，入院させる時や食事の処方を受ける時には必ず食物アレルギーがあることを申し出ていました。前年にアニマルメディカルセンターで検査を受けた際にも申告しています。東京夜間病院入院時にも，１９日朝の電話でも注意を促していたのに，全く無視されていたようです。

「これは，牛が入ってますよね。この子には牛肉は与えないように言ってありましたよね。」と言うと,相談してくる間に会計して待合室で待つよう指示されました。指定された再診日（８月２７日１６時）の予約診療カードが発行されたところへ，看護士が別の処方食（スペシフィックＣＫＷ）を持ち，ポン太を抱えて来ました。

看護士からポン太を受け取り抱きかかえると，いつも挨拶でするようにポン太が私の顔を舐めてきました。が，舐め方に違和感を覚えた上に何か異物があたるような感じがしました。手でポン太の口を開けてみると舌の先が卵の黄身のように黄色くなっています。触ってみるとしこりでもできているように硬くなっているではないですか。昨夜は，ケージから出してだっこした状態で面会していたので，ずっと私の顔を舐めまわしていましたが，舌に異状はありませんでした。また，先程の中村獣医師対面時にも,このような事態が発生しているという話はありませんでした。

「これは何ですか？」とポン太の舌を指して尋ねると，看護士はポン太の舌先を

確認することなく，「あっ，腫瘍のようなもののことですね。先生に聞いてきます。」と言って奥の部屋に入って行きました。しかし，すぐに戻ってきて「診察に入ってしまったので，明日，担当獣医師から電話させます」と言ってきました。ポン太の看護をしていたなら分かっているはずです。何となく“見つかってしまったか”というような表情をしたようにも見えましたが，閉院時間も迫っていたので，とりあえずポン太を連れて帰りました。この時ポン太が顔をなめてこなければ，この負傷を知らずに帰宅するところでした。

夜８時近くになって中村獣医師から自宅に電話がかかってきました。

「入院中に何度かもどしてしまい，その時に自分で舌をかんでしまったんです。」という話でした。これまでポン太が舌先を自分で噛んでしまうようなことはなく，実家の犬猫にも起きたことがないことなので疑いを抱きました。しかし，「いまは痛みもなく，今日はまだ不快感があるかもしれないけれど，すぐに直ります。心配ありません。」と言われたことから，この言葉を信用することにして，それ以上は考えないようにしていました。

入院前にはもどすようなことはなかったポン太が，入院中に嘔吐していたとは，この電話で言われるまで知りませんでした。

２１日１９時頃，アニマルメディカルセンターの女性スタッフから電話が入り，ポン太の退院後の様子をきいてきました。

「薬をのませるごとに元気がなくなっていくような気がします。処方食が気に入らないようで全く食べないし…」と答えると，しばらくして「食欲増進剤をのませるように先生が言っているのでのませて下さい。」言ってきました。

「食欲がないのではなく，何度も食べようとして前に行くけれど，においを嗅いで，これならいらないという感じで食べない状態なのにのませるんですか？」と問いかけると，「先生の指示ですから」と言われました。薬の副作用で胃腸が正常に働かなくなり，嘔吐し食欲がないという状態であれば，まずは薬の処方を見直すもの

だと思っていましたので，この指示を多少疑問に思いました。しかし「食欲増進剤を試してみてください」としつこく言われたので投与しました。

投与後しばらくして，ポン太は少しもどしました。食欲がでるどころか，しだいに激しく苦しみながらアワのようなものを嘔吐し,水様便をするようになりました。私は慌てて東京動物夜間病院へ電話しました。すると「カルテがアニマルメディカルセンターから戻ってきてないから，むこうの救急へ電話してみて。」と言われました。１８日に渡された電話番号に電話を入れ，受付の男性に状況を伝えると,「すぐに武蔵小杉の方へ連れてきてください」と指示され，電話を切りました。が，すぐにこの受付スタッフから自宅に電話が入り,「渡している薬を全て持ってきてください。」と言うと,「東京の方ではなく，武蔵小杉の方ですよ。」と念を押されました。この電話の発信元として「エキゾチックメディカルセンター」とネームディスプレイに表示されていました。

家からタクシーで向かうと数分で東京夜間病院の前を通ります。そこを過ぎて間もなくしてポン太の呼吸が乱れだしました。

病院に着くとすぐ，受付をする前に看護士が「先に検査しちゃいます。」と言ってポン太を奥の入院室へ連れていってしまいました。電話で応対した受付スタッフが「これに記入して下さい。」とカルテ作成を求めてきました。「カルテならあるはずですが…」と言うと,「昼のカルテも用意してあるけど，夜は別なので。」と言いながらアニマルメディカルセンターのカルテを示しました。そして「土屋先生が担当しているんですね。」とカルテ表紙右上に『土屋』と記し丸で囲んだ部分を指しながら確認してきました。「改めてカルテを作るなら東京の方でもよかったということですよね。」と尋ねると，カルテ記載の途中でしたが,「そこまでで結構です。」と言われました。

武蔵小杉で夜間診療を受けるまでは，アニマルメディカルセンターが２４時間診療を行っているものと思っていましたが，この時はじめて，２４時間診療していてるのは同建物内１階に設けられている動物救急医療センターという別病院であるこ

とを知らされました。

動物救急医療センターは入口を入ると受付・待合室があり，突き当りに診察室（実際にはこの部屋で診療はしてない）と書かれた小部屋が２つ並んでいます。その奥が入院室になっています。待合室から向かって左側の診察室へ通されて，看護士から問診を受けました。そのとき見せられたアニマルメディカルセンターのカルテの診療記録欄には，中段と下段の左端に書き込みがあっただけで，上段部は白紙で，検査所見の記載はありませんでした。

問診中，入院室の中央にある診察台で，ポン太が看護士により採血されているのが見えました。採血していた看護士が診察室へ来て，問診している看護士に向かって「先にレントゲン撮っちゃうから」と言って，ポン太をどこか見えないところへ連れて行ってしまいました。この時間，一人しかいなかった獣医師は，ポン太が病院に到着したときからずっと隣の診察室で他の飼い主と対話中でした。看護士だけで採血したり放射線を用いるレントゲン撮影などの検査を勝手に行っていた様子です。

しばらくして右側の診察室に通されると五十嵐獣医師がいました。「特に変わりないようです。」「心配だったら昼間また連れてきて，担当獣医に診てもらって下さい。」と言ってきました。レントゲンを撮ったり血液検査等を行っていながら，何の対処もしようとしないのです。「電話で指示された通りに薬をのませたら苦しそうに嘔吐しだしたんですよ。」「薬ののみ合わせや服用量を見直してください。」と申し出ても，五十嵐獣医師からは「私が勝手に調整するわけにはいかないので…。」という返答です。そこで私が「ここに向かっている途中でも呼吸が乱れたんですよ。何の処置もされずでは，また呼吸がおかしくなるんじゃないんですか？」と問い掛けたところ，「とりあえず担当獣医が出勤するまで預かりますので。」と五十嵐獣医師が言ってきました。そして，またもや「やらないとは思うけど，容態の変化によってはこういうことも必要になるかもしれないので…」と見積書を出してきて，未確定なものまでも支払いを求めてきました。

「明朝，アニマルメディカルセンターへ移しますので。」と切り出してきたので，「担当の土屋獣医師から直接話しを伺いたいので，朝病院へ伺います。」と申し出ました。しかし，「電話でいいので。」「来ていただいても獣医師が応対することはできませんので電話をいれてください。」と看護士から頑なに言われました。

２２日朝，病院に電話を入れました。土屋獣医師が出ると，昨夜入院後の検査や診療経過の説明もなくいきなり「三尖弁も壊れていたみたいです。」とうれしそうに，まるで私がみつけましたよとばかりに言ってきました。「僧帽弁と三尖弁がバランスよく壊れているから良いんですよ。」とセンターヴィル動物病院で説明受けていたことから，東京夜間病院入院時に僧帽弁と三尖弁の閉鎖不全であることはすでに話してあります。呆れた私は，「入院中になんで薬の服用量を調整してくれなかったんですか？　薬をのませる度にもどして具合が悪くなってます。」「もどすということ自体心臓に負担がかかるでしょ？」と言いました。すると「退院直前に丸１日以上，もどしてなかったから大丈夫だと思ってた。」と土屋獣医師は小声で返答してきました。これは中村獣医師の話と矛盾しています。そこで「１９日夜に面会した時にはなかったのに，それから２４時間も経ってない退院時に舌を負傷していたのはどういうことですか？　もどした時に自分で舌を噛んでしまったんだと聞いていたけど，違うんですか？」と質問を続けたところ，返答がありません。その後は，昨夜，預けてからどんな検査をしたのか，結果はどうだったのか，いまの容態は，など何を尋ねても一切返答がなく，無言状態で埒が明かないため「迎えに行った時に説明して下さい。」と言って電話を切りました。この電話以降，何度電話をしても土屋獣医師に取り次いでくれなくなりました。病院へ出向いても土屋獣医師と対面することはありませんでした。

２２日夕方，ポン太を迎えに行ったときも土屋獣医師はいませんでした。
応対したのは，また中村獣医師です。「利尿剤をのんでいるのにオシッコをほとんどしないのはどういうことなんでしょう？」と質問すると，「問題ないです。」とひと

言。そして,「利尿剤②と食欲増進剤を止めて，栄養剤の点滴を毎日していくようにします。」「通院で大丈夫なので，東京夜間病院の方でできるように手配します。」と告げられました。看護士から「どれでもいいから好んで食べるのを与えてください。」と，あらゆる疾患の処方食のサンプルと食後に投与する消化促進剤を渡され，受付で支払を済ませるようにいわれました。処方食というのは，その病気の影響，または治療に使用される薬剤の影響をうける栄養を補正するよう調理されたものであるのに，それをどの病気のものでもいいから食べさせろというのには呆れるばかりでした。受付でも，いつもならカードで支払ったとしても領収書が発行されていたのに，このときの支払いについては領収書を発行してくれないという不穏なことがありました。

会計が終わるとポン太が連れてこられました。しかし，直前まで点滴をしていたためなのか，ボーとしていて口をつぐんだままで顔もなめてくれませんでした。帰宅途中のタクシーの中でポン太が口を開けた時に鼻をつく臭いが漂いました。

家に着くとすぐに水の器の前に行って，顔を近づけるのに飲まないというより，飲めないようでした。舌が出てこないのです。しばらくするとその場に座り込んでしまったので，注射器で水を口に入れてあげました。見た目には舌先の黄色みはひいていましたが，舌に違和感があるためなのか，思うように水が飲めないようでした。

利尿剤をのんでいるのに，病院から戻ってから一度だけ少量のオシッコをしただけで，夜中に一度もオシッコをしませんでした。

２３日朝，依然として食欲もなく水のようなものを度々もどしていました。いつも朝起きるとすぐに顔をなめまわしに来るのに，それもありませんでした。

朝のませた薬がそのままもどしてあるのをみつけ,のませなおしたりしましたが,相変わらず元気がありません。次第に歩き方もフラついてきたため，アニマルメディカルセンターへ電話を入れました。これまでは，担当の土屋獣医師にしか電話を

取り次ぐことはできないと掛け直しを指示されたりしていたのが，何故か中村獣医師に取り次がれました。電話口に出た中村獣医師は,「すぐに連れて来てください。」と指示してきました。

病院に着くと，看護士がすぐにポン太を奥に連れて行ってしまい，通された診察室には中村獣医師だけがいました。

「何も食べてくれません。」「オシッコも昨夜は少量を１度だけ。今日も昼前にちょっとだけです。」と言うと,「やはり…」と中村獣医師はつぶやきました。

「薬ののみ合わせに問題はないのでしょうか？」「服用量に問題はないのでしょうか？」と質問すると,「もどすのは仕方ないことです。」「すべて副作用の心配のない薬です。個体によって合う合わないがあるので，数多くのませれば必ずどれかが効いてくれるはずですから。」と返答してきました。そして,「入院して治療を続ければポン太くんは完全に元の生活に戻ることが出来ますよ。」「治してあげましょうよ。」と言ってきました。

「本当に必要な薬であれば，注射や点滴で投与できるものは切り替えてください。」とお願いし，入院の手続きをしました。そして，ケージに入れられたポン太に面会したのですが，そのケージの入口に現在の体重として２．２kg と記されているのを目にしました。東京動物夜間病院入院直前まで食欲があり，通常２．７kg前後だった体重が治療開始後急激に減っていることを知りました。

１９時４０分,「容体が急変したから，すぐに来て下さい。」と病院から私の携帯に電話が入いりました。「そんなに，ひどいのですか？」と訊くと，中村獣医師が「悲鳴をあげたり，声張り上げて吠えたりしたんです。」というので，私は慌てて病院へ向かいました。

病院へ着くと,ポン太がベタッと腹ばい状態で舌を出したまま苦しんでいました。しこりのようなものができていた舌の先は亀裂がはいっていました。５～６㎜切り裂けていたのです。ポン太の姿を見て，舌を切り裂かれて悲鳴をあげ，容体が急変

したのではと頭をかすめました。

この時も担当の土屋獣医師は居らず，中村獣医師が「血栓ができてしまったようです。よくあることなんですよ。心臓と腎臓の機能が低下しているので今夜がヤマでしょう。」と言ってきました。

２３日にポン太を病院へ連れて行く途中，前脚骨折時にお世話になった病院の前を通ったとき，ここで診てもらおうかとも考えました。しかし，使用されている薬剤等を知らされていなかったことから，他の病院での対処は難しいだろうと思ってしまいました。また，入院中に舌を負傷させた負い目から，より慎重に責任もって治療にあたってくれるであろうと期待感から，再びアニマルメディカルセンターへ連れていきました。すると「入院して治療すれば完全に元の生活に戻れます。」と中村獣医師は断言しました。この言葉を信じて預けることにしたのに，目の前のポン太のあまりに悲惨な姿が信じられませんでした。この数時間のあいだにポン太に何をしたのか追求したい気持ちでいっぱいでしたが，いまはポン太の治療に集中してもらわなければと，気持ちをおさえていました。

ポン太に酸素注入器がつながれていただけで，何もモニタリングしていない様子だったので，中村獣医師に「心電図ではどういう状態なんですか？」と尋ねました。すると，「いまから検査するところです。」と返答し，すぐに看護士に向かって「心電図の用意をして」と指示していましたが，その場に５人いた看護士だれ一人として用意する気配もありませんでした。他の検査をした様子もなく，何を根拠に血栓ができたとか，心臓と腎臓の機能が低下していると断定しているのか，とても不可解でした。

「また，変化がありましたら連絡しますので。」と言われたため帰宅しようとした時，ポン太の目から涙が流れていました。耐え難い痛み苦しみから溢れ出ていたこのポン太の涙は，いまでも目に鮮明に焼きついています。

２２時１５分，「大変危険な状態です」と病院から電話が入りました。

病院にあと３０秒ほどで着くところで,「心肺停止です。急いでください」と電話が入りました。

病院へ着くと「いま，蘇生中です」と言われ，ポン太のもとへ行きましたが，モニターもなければ心電計・心音計なども見当たりませんでした。酸素ボンベもつながれていません。

蘇生中のポン太に手押しのゴムポンプで部屋の空気を口から送り込んでいるだけです。ポンプを押していた看護士が勝手に手を止めたとき，中村獣医師が小声で「もう少し…」と言って，看護士に手を合わせ頼みこんでいるのが見えました。看護士はふてくされた顔をしてポンプを押しだしましたが，ポン太のことを見もせずに他の犬の世話をしている看護士と全く関係ない話をずっとしていました。命が絶たれてしまう瀬戸際でのあまりに無神経な言動に呆れるばかりでした。

２３時,「手を尽くしましたが…」と中村獣医師が発しました。遺体を引き渡されるときには「ポン太君は偉かったですよ。最後まで自分で呼吸していましたから」と言われましたが，なぜこのような結果になったのかも，死因についての説明もありませんでした。

亡くなったポン太を抱いて家に戻り，いつも枕にしていたタヌキのぬいぐるみに頭をおいて寝かせたときに，解剖して調べてもらうべきかとも思いましたが，これ以上傷つけたくない気持ちと，ポン太が生き返ってくれるわけでもないのだから，今はなによりも天国に送り届けてあげることを考えなければと思ってしまったために，遺体が傷む前に葬式をすることを優先してしまい，真実を解明しにくくしてしまったことを後悔しています。

私の誕生日である８月２４日がポン太の告別式になってしまいました。六本木の葬儀場で父と弟にも立ち会ってもらいお別れ式をした後，棺に入れられたポン太を荼毘に付しました。親戚や友人から花や香典をいただきました。特に会社からは母が亡くなった時と同額の香典をいただきました。

ポン太が僧帽弁閉鎖不全症との診断を受けてからは，トリトン動物病院でもセンターヴィル動物病院でも，呼吸状態に異常がみられると先ず心臓の問題と考えられました。しかし，心電図検査や薬への反応，病状の変化から，別の原因や別の病気の疑いが浮上し，診断が変更されることがありました。最終的には，呼吸のみだれは気管虚脱によるものと診断されたり，甲状腺機能低下症を患っていることが判明したこともあります。肺水腫が治まってもまたぶり返すことから詳しい検査が行われて，肺水腫の原因が気管支炎であったことが判明したこともありました。

私が記録してきた甲Ａ第１６号証として提出していますが，これにより僧帽弁閉鎖不全症の治療を開始してからのポン太の治療歴を確認いただけると思います。

東京動物夜間病院へ行く直前のセンターヴィル動物病院の診断では,「僧帽弁閉鎖不全症の悪化はみられない，むしろ少し改善されているようなので僧帽弁閉鎖不全症の薬は様子をみながら減らしていきましょう。」「ただチラーヂンについてはこのまま投与し続けないとこの子は生きていけません。」と言われていました。ポン太の心臓は薬によりうまくコントロールできていたのです。

８月１８日に東京動物夜間病院へ連れて行く直前まで，ポン太は食欲もあり元気でした。この時，ポン太が救急の治療が必要な状態であったのならば，そういう時のためカルテを作り心電図・心エコー・レントゲン・血液検査等のデータを保存しておいたアニマルメディカルセンターへ直接連れて行ってたことでしょう。

まったく予想していなかった最悪の事態を招いた原因や死因を確認するために，２３日分の治療費の支払いも兼ねて２７日に病院へ行きましたが，担当獣医師も病院長も不在ということで会わせてくれませんでした。病院長はいつも不在なのか，一度も姿を見たことがありません。そこで，総責任者で病院内の出来事は当然把握しているはずの病院長宛に通知書を送付して治療明細書・処方箋を請求しました。

病院長宛に通知したにもかかわらず，平成１７年１０月６日付回答書・報告書は事務長によるものでした。処方箋を求めているのに，回答書には成分名が連記され

ているだけで，調剤に使用された薬剤の製品名すら記されていません。

薬剤師で製薬会社勤務の義弟は，この連記された処方薬名を見て「１０種類もの薬を１度に，しかも併用してはいけない薬やモニタリングできない状況での使用が禁じられている薬まで…」「そりゃ死ぬよ。死なない方がおかしいよ。」と驚いていました。

投薬に問題があったことを教えられ，病院からの回答書面をじっくり眺めたところ前立腺肥大とあるのに気づきました。報告書（甲Ａ第４号証として提出しています。）のレントゲン所見・超音波所見に，診療中に一度も前立腺という言葉さえ出なかったにもかかわらず前立腺肥大と記載してきているのは，泌尿器系に異常があったことにしたいからなのでしょうか？

事務長名の回答では意味ないと思ったことから，病院長宛に通知書を再度送付しました。その回答が１０月２１日付発行で届きました（甲Ａ第１８号証として提出しています。）が，またもや亡くなった原因について全く記載がありません。それどころか，ケガは自宅で負ったものだと書いてあります。まるで私が虐待して負傷させたような書き方です。入院中の事故をしらばっくれるばかりか，退院後に飼い主である私が負傷させたものだと回答してきたのには怒りを通り越し唖然として呆れてしまいました。

処方箋の明示もないため，手元にある処方薬を薬剤師で調剤薬局を経営している妹に分析してもらいました。それをまとめたのが甲Ｂ第２６号証です。この分析結果と病院から送られてきた検査データ（甲Ａ第４号証）から入院後に急性腎不全を発症させられていたことが浮き彫りになり，ポン太の死には医療過誤があったことを確信しました。

不誠実な対応をし続ける病院に対しては，訴訟による真実解明を決断するしかありませんでした。しかし，提訴するとなると病院経営者が不明です。各病院から発行された領収書等には経営者の表記がなく，病院施設に掲示もありませんでした。

そこで，アニマルメディカルセンターが所在する建物の登記簿謄本を取り確認したところ，所有権者として株式会社アニマルメディカルセンターと記されていたことから，アニマルメディアカルセンターと同地に所在する動物病院および東京動物夜間病院は，この法人による経営と推測しました。

提訴準備をするなかで，アニマルメディカルセンターはこれまでにも裁判を起こされていることを知りました。

支援してくれる人たちからも，悪質な病院であるとの情報が寄せられています。その一部を本書に添付します。

裁判所から第三者の獣医師の意見書提出を求められたことから，意見書をお願いに伺った獣医師たちは皆，「最悪の病院に連れていっちゃったね。」と被告病院の院長のことを知っていました。そのため，「名前を伏せてでよければ。」「身の危険があるからできない。」という返答しか得ることができませんでした。

この病院のことを調べれば調べるほど，とんでもない病院であることを知らされ，このような病院を選んでしまい，ポン太には申し訳なさでいっぱいです。

第４　センターヴィル動物病院について

別訴において平成１８年８月２９日に被告からＦＡＸされてきた、アニマルメディカルセンターのカルテと被告が主張している乙１号証を見て、センターヴィル動物病院は被告にポン太のカルテを提供している、このふたつの病院は通じているということが分かりました。それは、乙１号証のカルテ表紙の“HISTORY”欄に、東京動物夜間病院，アニマルメディカルセンター，動物救急医療センターいずれの病院スタッフにも話してないセンターヴィル動物病院でのことが記されていたことからです。

カルテの開示を求め、代理人と供にセンターヴィル動物病院へ出向いた原告（私）には、〇〇院長はカルテ開示を拒否していました。１ヶ月以上に亘って代理人から幾度も催促したことにより、カルテ開示の約束を取り付けました。私がつけてきた

通院記録からセンターヴィル動物病院の部分を抜粋し持参したものと、〇〇院長から示されたカルテの写しとを比較したことで、①平成１７年２月２８日に肺水腫を発症していたこと、②カルテが改ざんされていること、が判明しました。

① この日は、膵炎で２回目の入院の退院日でした。退院当時は「入院中にむせこむことがあったから、そろそろ利尿剤も投与していった方がいいかもしれないので」と、ラシックスを渡されていたのですが、甲Ａ１５号証カルテにラシックスを３回も静脈注射している記録があるのを見つけ、問い質しました。〇〇院長から、入院中の輸液ミスにより肺水腫を発症させてしまっていたことを、この時に初めて聞かされました。３月５日と３月１２日には肺水腫の状態を調べ、完治していることを確認しているということでした。

② センターヴィル動物病院では、診療中に〇〇院長から本日出される薬として告げられたものと、会計時に渡された薬が違っていることが度々ありました。７月２日と２３日の調剤ミスについて、カルテには病院に不手際があったという記述がありません。しかも、両日の調剤をしたのは〇〇獣医師であったのに、〇〇看護士が行ったことになっています。記載内容を順追ってみると、家に戻ってからの電話により記されたはずのラシックスの投与量の件のことが、病院で診療中および会計時には記載されているべきことよりも前に記載されているばかりか、８月６日の診療時に話が出たことまでが書かれています。書き換えたり内容を考えずに前後入れ替えたりと、操作したことから辻褄が合わなくなっているのです。センターヴィル動物病院のカルテは、B５サイズ単票用紙を使用し、ページ数が記載されているものの綴じられているわけでなく、バラバラの状態でクリアファイルに入れられているだけだったので、いくらでも差し替え可能です。

裁判所にカルテを提出されることにより、誤調剤が公になることを嫌い、書き替えたものでごまかそうとしたことを認めた〇〇院長は、別棟にカルテのファイルがあるため、該当する部分の写しをこれまでの検査データと一緒に、今日中に発送すると約束しました。しかし、届かないことから〇〇院長に催促の電話を入

れると、「診療ミスがあったことや調剤ミスがあったことについて、今後一切追及しないという書面をよこせ。」と言ってきました。あきれた要求です。

この件は、本事件において追及することではないので、とりあえず受け取ってきたセンターヴィル動物病院カルテのコピーをそのまま提出しています。

第５　鑑定人選定について

仮に鑑定をされ，鑑定人選定をされる場合，是非申し上げておきたいことがございます。

被告病院はＪＡＨＡ（日本動物病院福祉協会）とＮＡＨＡ（日本動物病院会）に加盟しています。

平成８年４月，検査もせずに不要な膝の手術を迫った病院（〇〇〇〇動物病院〇〇分院…現在移転し〇〇〇〇動物病院〇〇〇分院と改名：〇〇区〇〇〇－〇－〇（本院：〇〇区〇〇〇－〇－〇），平成１５年９月，肺に異常がなかったのに薬の追加投与を強要した病院（〇〇〇〇動物病院：〇〇区〇〇〇－〇－〇）もこれらに加盟している病院であることが判明しました。

よって，ＪＡＨＡ，ＮＡＨＡに加盟する動物病院の獣医師は除外して鑑定人を選定いただくことを希望いたします。